

12.5mの堤防&10mのかさ上げ

一本松の陸前高田市の復興作業

久慈市から陸前高田市を三陸鉄道の職員による“フロントライン研修”を使つての現地調査（地震・津波対策議連 H30 年 5/16~5/18）。

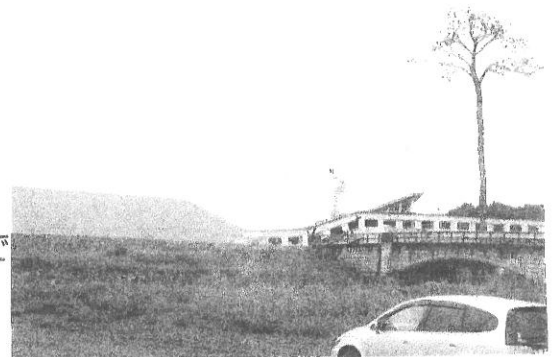
陸前高田市は扇状地ゆえに 3・11 の津波（15.1m）で 5.5m の堤防を越えて山のふもとまで高田地区・今泉地区のすべての住宅・建物が押し流されてしまいました。

山の方から海に向かって高台地区、10mかさ上げ地区、かさ上げしない地区、12.5mの防潮堤、マツ林と砂浜の海といった計画の概要を陸前高田市議会副議長と市の復興局長に説明していただきました。

かさ上げ地区の奥の場所に 6 階の復興公営住宅、アバッセタカタ・ショッピングセンターそして住宅が。復興局長はこの地点が全体の中心となると語り、更に国の支援は平成 32 年までなので、それまでに完成しない事業＝かさ上げした後の住宅建設への支援がどうなるのか？財源的不安を語りました（国に要望中とのこと）。

街づくりの基本は①安全な高台に住宅を造るため、区画整理で 10mのかさ上げ地区に住宅を（かさ上げ工事費 1600 億円）②高さ 12.5mの防潮堤を延長 2km（工事費 700 億円）とのこと。

かさ上げの土地の沈下率今調べており、今後 H32 年までに完成させるとのこと。土砂の必要な分をどこから調達するか課題と語りました。



被災から 7 年もたっており、山の方の高台にすでに家を建ててしまった方が多く、今実施しているかさ上げ工事が終了した時点で家を建てようとする方が少なくなりました。それ故、かさ上げ地区の土地利用が決まっていない面積が 60%とのこと。

12.5mの防潮堤では 3・11 の 15.1mの津波を防げないので“津波が来たら避難することを原則に街づくり”をしたとのこと。山へ向かって大きな道路を 4 本作りあくまでも“逃げる”を前提にした街づくり。だから災害復興公営住宅も 6 階の一階部分は居住にせず集会場などにしました。

最後に“12.5mの堤防工事と一本松の状況”を視察。12.5mの堤防の上から見える陸前高田は全域新しい街がつくられていく様子。海岸側では国の“復興祈念公園”を造るため松林の防風林と白砂を導入して白砂青松を取り戻す作業が行われていました。

10mかさ上げされた土地には新しい街としていろいろな箱モノが建てられていますが陸前高田の産業は？生業は？ちょっとわからない感じがしました。

視察対象が三陸海岸（岩手県）のみでしたが、海岸線にコンクリートの 12~14mの壁が続く様子を見ると、今も“人間がどう自然を支配（克服）しようかともがいてきたこれまでの姿”の延長でしかないような感じがしました。2011 年 3・11 で私たちは自然の恐ろしさ・大きさを知り、人間の小ささを知り、「人は自然の中で生かされている。活かしてもらう存在だ」と悟ったはずなのに、このような街づくりでいいのだろうか？・・・でもこれまでの考え方を急に新しい考えに移り変われないのが現実なのかも・・・とも思いつつ。

新しい自然と人間との関係性に基ついた街づくりをしてほしいものです。